

「放蕩息子の帰還を迎える父親」

2015年10月08日

ルカによる福音書 15章 11節～24節。また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

主イエスは三つ目の譬えに「放蕩息子」を語られた。譬えは対象のワンポイントを取り入れて単純化して表現するもので、当時の社会通念にはないとか、そんなことはあり得ないとか、理屈で詮索すると譬えの意味が伝わらない。

裕福な父親に二人の息子がいた。弟が父親の財産を贈与してもらい、換金し、遠くの国に旅立った。悪い友達に出会ったのであろうか、放蕩に身を持ち崩し、貰い受けた全財産を使い尽くした。飢饉が襲い、食べる物に窮したので、汚れた動物と信じられている豚を飼う仕事についた。空腹を満たすため、豚の餌のいなご豆を食べたいと思うほどであったが、食べ物をくれる人はいなかった。その時、彼は父親を思い出した。父親の所には多くの雇い人がおり、有り余るパンがある。神に対しても父親に対しても罪を謝罪し、息子と呼ばれる資格はないので、雇い人の一人にしてくださいと言おうと決心した。郷里に帰ると、父親は遠く離れていたのに、息子と認め、憐れに思い、走り寄って首を抱き接吻した。息子は謝り、息子と呼ばれる資格はないと言った。ところが、父親は僕たちに「急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ」と言いつけた。そして、喜びの祝宴を開いた。こんなことがあるだろうか。悔い改めたというならば、それを確認してから、許すのが普通であろう。しかし主イエスは、神は悔い改めの確認などを求めず、無償で、死から生への帰還を喜び、受け入れると言われる。この譬えは、徴税人や罪人が主イエスの言葉を信じ、神に立ち返っていることを譬えている。(続き)